

琉球大学学術リポジトリ

ハニ族の棚田

－千年の労作から世界文化遺産候補へ－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-07-21 キーワード (Ja): ハニ族, 棚田, 農耕儀礼, 世界遺産, 農具, 雲南 キーワード (En): 作成者: 黄, 紹文, 稲村, 務(訳), Huang, Shaowen, Inamura, Tsutomu (trans.) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21233

ハニ族の棚田一千年の労作から世界文化遺産候補へ

黄 紹文^{訳注1} (稲村務訳)

Hani Terrace in China: From an offspring of millennial efforts to the World Heritage Submitting

Shaowen HUANG (trans. Tsutomu INAMURA)

キーワード：ハニ族、棚田、農耕儀礼、世界遺産、農具、雲南

文化とは環境に対する人類の社会的・生態的な適応である。人間は生物もしくは社会的な人間として既に生物＝生態的属性を有しているし、また社会＝生態的属性も持っている。社会的な人間として、人類の社会＝生態的適応は様々な文化を形成した。人類は環境に対する適応の過程で、文化を創造し、自身の生存する環境に適応し、文化を発展させて変化する環境に適応してきた。また、人類は文化を使って環境を改造し、自身の生存を更に改善することもしてきた。ハニ族の棚田文化はまさに自然環境への適応のなす所であり、また文化的な適応でもある。棚田文化は、人々が長期の棚田農耕の実践において形成し、認識してきた自然であり、自然への理念でもある。また、それは周囲の森林の生態系とともに作り出した極めて密接な文化的＝生態的連鎖であり、宗教・信仰文化によって「人と大地」の関係する行為の規律を調節している。また、棚田文化は、科学的環境保護を生み出し、ハニ族地区の森林を保護し、人と環境の相互的影響を作り出し、相互作用の文化的生態の聖典ともいえるモデルである。これが本稿でハニ族の棚田の文化生態を詳述する理由である。

I ハニ族の棚田の文化、歴史的淵源

1 漢籍に記載されたハニ族の稲作文化

春秋戦国時代、中国西南部の大渡河の河畔に棚田の原型が出現していた。『尚書・禹貢』には、「和夷“所居の大渡河畔，“其土青黎，其土下上，其賦下中三錯”」（「和夷」の住むところは大渡河の河畔で、其の土は黒く肥沃である。其の土は「下の上」であって、「下の中」の租税としているのは誤りである）とある。ここでは直接に「梯田」（棚田）には触れていないが、この田が「下の上」という語で表すべきであったことについて仔細に推定すれば、それが棚田を指していた可能性は排除できない。ここでの「和夷」はハニ族の先民のみを表しているのではないにせよ、「和夷」の中にハニ族の先民が含まれていることは論を待たない。そのため漢籍中のハニ族の棚田文化にかんする最も早い記載は『後漢書西南夷列伝』とされる。「西南夷“造起陂池，開通灌溉，墾田二千余頃”」（「西南夷」は溜池を造り、灌溉をし、墾田は二千余頃（約133ha、1

^{訳注1} 雲南省社会科学院紅河州民族研究所研究員、紅河学院客員教授

頃=1,000畝)ある。高山の流水を使って灌漑するのはハニ族の典型的な灌漑の方法である。隋唐の時代になって、ハニ族の先民の一部は哀牢山、六詔山などに移り住み、漢籍では「和蛮」と称された。晩唐の樊綽による『蛮書雲南管内物産』に曰く、「従曲靖州已南、滇池已西、土俗惟業水田」(曲靖州以南、滇池より西では人々は水田を営む)。この記述は主に平地の水田を指しており、平地の水田と山地の蛮人の山の田とを区別して次のように特別に書いている。「蛮治山田、殊為精好」(蛮人は山の田を治め、それはとても精巧である)。ここでの「蛮」という語はハニ族のみを示しているわけではないが、唐代以降、紅河流域の元江、墨江、紅河、元陽などハニ族文化の核心の地域が形成されており、その間に棚田は集中して分布していた。ゆえに、この「蛮」はハニ族の先民といてよい。宋代になって「梯田」という語が文献に正式に出てくるのは、宋代の範成大による『騷鬻録』である。それには「仰山嶺阪之間皆田、層層而上、至頂、名梯田。」(山峰の傾斜地はほとんどが田であり、層になって山の頂まで連なっており、「梯田」という)とある。明代の徐光啓による『農政全書』にはわが国の古代の7種類の田制の種類の1つとされている。同書の五巻『田制・農桑訣田制篇』に元代の『王禎農書』を引用して「梯田、謂梯山為田也。夫山多地少之處、除磊石及峭壁、例同不毛。其余所在土山、下至橫麓、上至危巔、一体之間、栽作重躋、即可種藜。如土石相半、則必壘石相次、包土成田。又有山勢峻極、不可展足。播殖之際、人則僂僂蟻沿而上、構土而種、躡而耘。此山田不等、自下登陟、亦宜粟麥。俱若梯躋、故總曰梯田。」(梯田(棚田)とは険しい山を田とするものである。山が多く平地が少ない所で、石と絶壁以外全くの不毛の地といってもよい所である。その残りの土のある山の山麓から山頂までずっと急な傾斜地を耕作し、アカザ(Chenopodium album)はすぐ植えられる。土と石が半々といったもので、石を積んで土を囲わなくてはならない。山はとても急で足も伸ばせない。種まきの時は、人は腰を曲げ蟻のように登り、種をまき、草を取る。この田はばらばらな大きさと、下から登って行き、粟や麦でもよい。梯子を上っていくようなので「梯田」という。)とある。詩に次のように詠われる。「世間田制多等夷、有田世外誰名題；非水非陸何所兮、危巔峻麓無田蹊。層躋橫削高為梯、举手捫之足始躋；僂僂前向防巔擠、佃作有具仍兼携。」(世間に田制は多いけれど、世外の田とは誰が名付けたか。水もなく陸もない、険しい山に沢もない。層を登り梯子のようで、手足を使って這い上がり、背を丸めて登るが、畑仕事にはまだ道具も携えなくてはならない。)このような「世外」棚田は清代にはほぼ出来上がっており、壮観な規模になっていた。清代中期嘉慶年間の『臨安府志・土司志』には哀牢山のハニ族の棚田の耕作風景が活き活きと描かれている。「臨屬山多田少、土人(窩泥)、依山麓平曠處、開鑿田園、層層相間、遠望如画。至山勢峻極、躡坎而登、有石梯躋、名曰梯田。水源高者、通以略杓(卷槽)、數里不絕。」(臨安には山が多く田は少ない。土人(ウォニ：ハニ族の漢族からの旧時の他称)は山麓の平らな場所に住み、田を開墾し、田は層になって絵のようである。山は険しく窪んだところに沿って登り、石の階段を登る。これを「梯田」という。水源は高い所にあり、樋が巡っていて、数里にわたって途切れることがない。)

棚田の分布は紅河の南岸地域、哀牢山の麓の方に集中している。明代になるとハニ族の開墾した棚田についてのより明確な記載が出てくる。『臨安府志』十八巻の「土司志」には次のように書かれている。

「左能亦旧思陀属也、後以其地有左能山、故曰左能寨。洪武中、有夷民吳蚌頗開闢荒山、衆推為

長。尋調御安南有功，即以所開闢地另為一甸，授長官司，世襲，隸臨安。」（左能はかつて思陀土司^{表註2}に属し、後にその地は左能山とした。かつては左能寨といった。洪武年間に呉蚌頗という夷民がおり荒れた山を開き、人々に長として推挙された。安南での功があり、開墾した土地とは別に更に土地を与えられ、長官の位を授けられた。世襲であり、臨安に属す。）また、雍正年間の『雲南通志』二十四卷『土司伝中・納更山巡検』には「明洪武中，龍咀以開荒有功，給冠帶，管理地方。尋授土巡検，伝子龍政……」（明代洪武年間に龍咀という人が山を開いた功により、官位を授けられ、その地方を管理することになった。土巡検という位で、息子の龍政に官位は継がれた。）とある。明代の『土官底簿』の「納更山巡検司巡検」には「龍政，車人寨冠帶火頭，系和泥人…」（龍政は車人寨（村）の頭であり、和泥（ハニ）人の系統である）とある。

これまで述べてきたことを総合すると、ハニ族の分布と棚田の分布は切っても切り離せない関係であり、今日の人口からすると、棚田の比較的集中している墨江県（58%）、紅河県（76%）、元陽県（54%）、緑春県（88%）は、それぞれの県全体の人口のかなりの割合をハニ族が占めている。この地域の棚田はハニ族が耕作しているというだけでなく、ハニ族の先民が最初に開拓した棚田の数の絶対数が多いのも事実である。そのため、この地域の人文地理的な現象を指して「ハニ族棚田文化区」と称し、そこには豊富な歴史的データとハニ族の地縁的な文化の深さがあると理論付けることができる。

2 ハニ族の棚田の稲作起源神話と伝説

ハニ族の神話の中には、稲の起源と稲作の始まりの伝説はとて多く、ここではその数篇を選んで、ハニ族の稲作文化の悠久な歴史を説明する。

（1）稲作の始まりの伝説

シャオベxal'aoqbeiは棚田の開墾の始まりという意味である。この話は元陽などに伝わっているものである。太古の昔、ハニ族の先民は狩猟採集によってしか生活を維持することができなく、人は飢えてその顔は猿のように痩せ細っており、太陽に晒されて干乾びた路傍のミミズのようなであった。天神ザナマZaqnaq aqmaはハニ族が餓死するのに忍びがたく、ハニ族に言った。「起きなさい。すぐにネズミがどうやって穴を掘るかを見てみなさい」ハニ族は穴の中に草の種を入れて、後脚を使って埋めているネズミをみた。山火事の時も大火に焼けてしまわず、間もなく親指くらいの太さの茎が伸びて、草の種が実りその実をとって食べた。こうして先祖は草の種を植えることを学び、斜面の麓から頂上まで持って来た種を埋め、山の背から山の麓にまで埋めた。山に広がり焼けた黒い土灰もまた穴を塞いだ。草の種は6日間埋まっていた、先祖は太い芽が出ているのを見た。草の種が土の中で日数を1巡すると、先祖は山々がすべて皆軟らかい草の苗に満ちているのを見た。ハニ族は朝に門から出て平地を歩いていても、大きな水田を開墾することを知らなかった。晩には家に帰る祖先は滔々と流れる河の水を眺めながらも、河の水を引いて灌漑をすることを知らなかった。誰が彼らに田を作ることを教えたのか？誰が彼らに灌漑をすることを教えたのか？最初に先祖に田を耕す助けをしたのは水牛だった。水牛は人から鼻に紐を付け

^{表註2} 土司とは中央が直接任官した流官に対して、土地の少数民族の族長に統治を任せられた官、思陀、左能などは本来、イ語やハニ語であるが漢籍に出てくるので漢字のままとした。

られ引っ張られ、厭々ながら人に操られている。最初に祖先に水路を作って水を引くのを助けたのは蟹だった。蟹は水路を作って水を引くのに苦勞して眼が飛び出てしまった。……

(2) 稲の起源

元陽などに伝わる『天・地・人の伝説』には、大きな魚が宇宙天地と原初の1対の人を創り出し、男をズタZyutaq、女をタポTaqpaoqといった。タポは12人の子供を生んだが、三男は龍だった。龍は成長すると海に入って龍王となった。タポが育ててくれた恩に報いようと、タポに3本の竹筒に入った品物を捧げたが、その中の1本がスースーという音がしたので蓋を開けてみて見ると、金色に輝いている穀物の種があった。それで彼女はその種を高い山に蒔いた。山の斜面にイネ、コーリャン、ソバが育った。

こうしたハニ族の祖先が穀物を馴化させるという話は遷徙史詩『哈尼阿培聡坡坡』Haqniq Apyuq Colpolpolの中では次のように言われている。ハニ族のある才人ゼヌZeilnuの名声は広く知れ渡っていた。彼の摘み取ってきたふくよかな草の種を真っ黒な軟らかい土に入れ、背負ってきた水をまるで雨の神のように、草の種の上に撒くと、高々とした茎が草の種から伸びて来た。葉が落ちる時、黄色く瑞々しい草の種として実を結び、先祖は香り豊かな草の実を食べ、それをトウモロコシ、ソバ、イネ、コーリャンと名付けた。

元陽、金平などに伝わる「新米を先に犬に食べさせる」という伝説によると、次のようである。地上のハニ族は服も食べ物も無く、飢えや寒さに苛まれる日々を過ごしていた。人々が1日中あくせくしていても服も食べ物もない苦しい日々を過ごしているのを天神モミMoqmilの娘が見てモミに言った。「お父さん、私たちは天上にいて、77種の作物があり、食事や衣服には困りません。けれども、人間であるハニ族は着る服も食べ物も無い日々を過ごしています。もしも天上の作物の種を人間にあげたならば、私たちのように満ち足りることでしょう。それはとてもいい事でしょう。」天神モミは娘の話聞き終わると冷たい表情で答えた。「娘よ。人間は3年待たなくてはならない。そうすれば77種の作物の種をもらうことができる。こうしたことは娘の家の扱う問題ではない。我々は人間の暑さ寒さや飢餓を心配したりするのではなく、天の掟にただ従うのだ。」数日後、モミの娘は人間の苦難の日々を救うために、こっそりと1袋の種を人間に持って来て、稲の植え方を人々に教えた。後にモミは娘が自分に背いたことを知り、彼女を天の宮に呼び戻し捕まえて戒めた後、天の牢に入れてしまった。しかし、モミの娘は人々に穀物を食べさせ綿を与え、服を着せようと、天の牢を抜け出し76の作物の種を盗んで人間に与えて植えさせた。天神モミは娘が天の掟に触れた事を知ると娘を母犬に落としめ、人間と一緒に住ませ人間の門番にした。それからというもの、哀牢山のハニ族は毎年秋の収穫の時の新米祭では、田から収穫した新米を炊いた後、祖先に捧げ、人々が食べる前に、まず1匙の新米の飯を犬に食べさせるという習慣ができて今に到っている。

3 棚田と村落の調和

ハニ族は山の中腹の海拔1,400~1,800メートルの山地に好んで住む。この辺りのなだらかな南向きの斜面を理想的な居住地としている。この一帯は哀牢山の気候の中でも、年の平均気温が15~18℃で、年間の日照時間が1,500~1,800時間、霜が降りることもなく、年間の降雨量が

1,500~1,700ミリで、雨量は十分で、気候は温暖であるからである。ハニ族は海拔800メートル以下の河谷地域を猛暑で瘴癘の横行する土地とみなし、かつての医療が整わなかった状況では、人々の生存と発展が脅かされると考えていた。また海拔2,000メートル以上の寒い気候では人畜や作物の成長に不利である。山の中腹は冬暖かく夏涼しい気候で、人々の生産生活に有利である。かつてのハニ族の諺には「肉を食べたければ高山、子供を産むなら山腹」といわれる。これは生き活きとした形でハニ族の哀牢山の自然地理環境の垂直的分布を表している。

ハニ族は新しく村を創るとき、村の位置の選択には必ず森林、水源、なだらかな山稜あるいは斜面であることなど棚田を開いていくのに不可欠な条件が考慮されている。水源の林、村落、棚田の位置にはすべて厳格な規則がある。村落の下はなだらかな斜面で、尾根は棚田に開墾されており、棚田と村落はバランスを保たねばならない。多くの村落では村門を出るとすぐ棚田というようになっており、棚田は村落から山沿いに河谷地帯を囲んでいる。海拔2,000メートル以上の森林は水源のための林であり、高山の密林は池や溪流の水を育み用水路からその下の村へ水が引かれている。その水は人や家畜が使うほか棚田に流れ込み、棚田は水路と繋がっており、沢の水は順々に棚田を上から下へ流れ、途切れることはない。

一般に1村落は1つの棚田を運営しており、大きな村は棚田の面積が広く、小さい村落は面積も小さい。千畝(67ha)を越える棚田をいくつかの村で共同運営しているところもあり、灌漑用の水路もいくつかあって、受益者で共同管理していることもある。ハニ族の自然村は大きい場合700戸余り、小さい場合は10~20戸程度である。60~100戸の自然村が比較的多く、大きな村と小さな村は混じりあって分布しており、村落同士の距離も1,000メートルから3,000メートルというようにばらばらである。

ハニ族の先民は哀牢山に移り住んでからかなり長く定住しており、半耕半獵で生活を立てる段階であった。彼らは南向きのなだらかな山稜や斜面に住んだ後、周辺の斜地に乾燥に耐える陸稲、蕎麦、芋類を植え、土地の肥沃さを保ちながら斜地を台地に変えていった。フィールドワークによってわかったのは、ハニ族の開墾は順序があって、まず斜地に焼畑の作物から始め、土地が肥えてくると、斜地を台地に変える。続けて数年、乾燥地の作物を植え台地を自然に安定したものにしていく。台地に乾燥地の作物を植えている時期に、用水路などの棚田の準備を始める。大きな溝渠なら、道具の未発達なころは数個の村落が一緒になって数年あるいは数十年をかけて掘っていた。

斜地を台地に掘る時は1番下の層から始める。彼らは何の測量機器も機械も使わず、ただ短柄の板鋤を使って斜度を知り、棚田の広さや長さを設計する。足で踏みつけるなどして台地を固める。階段は人のために真っ直ぐに伸ばすというわけにはいかず、自然の湾曲に沿って伸ばし、台地の圧力が均等になるようにして簡単に崩れないようにする。台地に用水路を作って水を引き込む前に、畑に植える作物を植え、施肥をして耕すなどの耕作を繰り返す。土壌の地力と含水率を高め、台地の土を稲作に合うようにする。台地は日や雨に晒され自然に沈降し、堅固な基礎を作った後に水を引いて泥で畦を築く、それから水を満々と張った水田を作る。このように1つの丘に1つの丘が接し、低層から上のほうに徐々に、長さはまちまちで広さも様々な棚田が累々と伸びていった。そうして麓の河谷から山腹まで伸びて行って、壮観な田の山が形成されていった。

ハニ族の棚田と村落の調和した位置は棚田とともに人口が増加していったことを反映しており、



写真1 棚田と村落

村落の周囲には上から下の山麓へと河谷地帯が広がっていき、森林と用水路と村落と棚田の四位一体の秩序ある分布とともにハニ族の棚田の重要な人文景観が調和している。このような人と土の作り出した調和した配置は、田の多い少ないで起こる紛争や人間関係の悪化など免れない問題を回避するのに役立った。また、人に対して田の多い時の土地の荒廃にもならなかった。人は存分に能力を発揮し、地はその力を十分に出し、人と土は助け合って自然と調和していた。



図1 雲南省南部の主な地名

II ハニ族の棚田の分布

ハニ族の棚田は雲南省南部の哀牢山脈の下段の元江から紅河流域、藤条江流域、把辺江から李仙江流域である。不完全ながら統計的には、総面積134万畝(約89,339ha)。行政区域からみると紅河ハニ族イ族自治州の中では、元陽県、紅河県、緑春県、金平県の4県および建水県の坡頭郷、普雄郷のハニ族の棚田は全部で89.98万畝(約60,000ha)になる。普洱市にはハニ族の棚田が36万畝(約24,000ha)あり、主に墨江ハニ族イ族自治県の龍壩、壩溜、双龍、碧溪などの郷鎮、普洱ハニ族イ族自治県の黎明、普義、把辺などの郷鎮、江城ハニ族イ族自治県の嘉禾、曲水などの郷鎮、瀾滄県の惠民、発展河などの郷鎮、孟連県の臘壘、南雅などの郷鎮である。玉溪市には約9万畝(約6,000ha)あり、主に元江ハニ族イ族自治県の羊街、那諾、咪哩、羊岔街、因遠などの郷鎮および新平県、双柏県、鎮遠県の哀牢山の自然保護区周辺である。西双版納州勐海県の格朗和、西定、巴達などの郷鎮にも棚田は分布している。哀牢山の棚田の分布区域からすると、ハニ族が集居ないし散居している地域には棚田が均しく分布しており、ハニ族の分布区域と棚田の分布区域は2つにして1つと、ある程度はいうことができる。しかし、規模や壮観さの度合いは、紅河流域

域から西の把辺江流域に行くにつれて段々弱まっていく傾向にある。

区域を横断して空間分布をみると、棚田は主に海拔300から1,900メートルの間にあり、海拔と気候帯を勘案すると、ハニ族の棚田は凡そ3つに分類できる。一つは海拔800メートル以下の熱帯河谷地帯の棚田。二つ目は海拔800~1,500メートルの亜熱帯の中低山地帯の棚田。

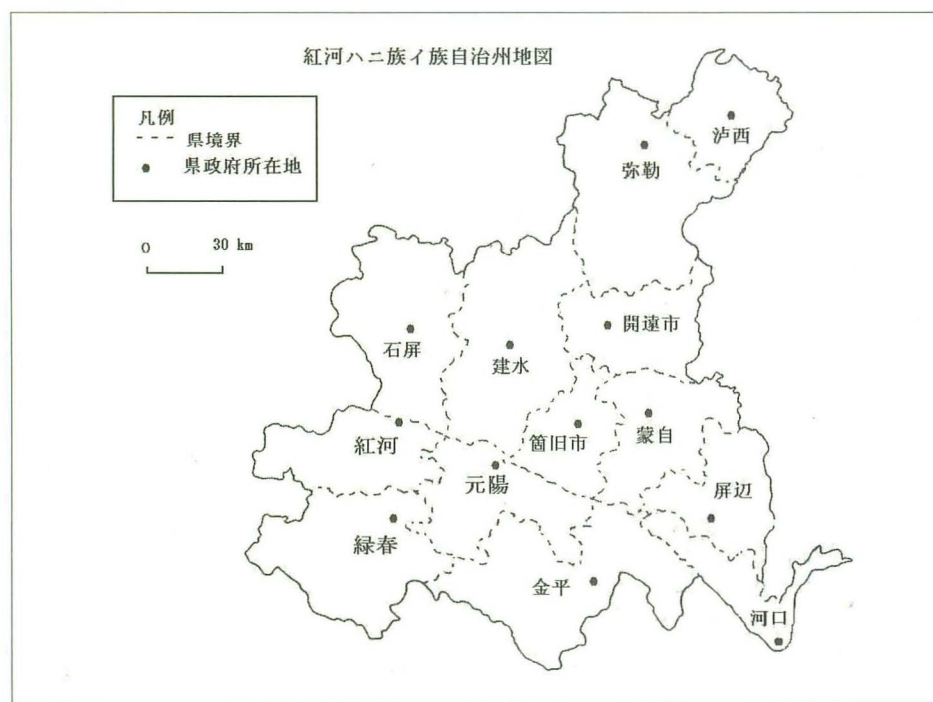


図2 紅河ハニ族イ族自治州
(『紅河哈族彝族自治州概況』より訳者作成)

三つ目は海拔1,500~2,000メートルの温帯の高山地帯の棚田である。熱帯河谷地帯の棚田と温帯高山地帯の棚田は比較的少なく、亜熱帯中低山地帯の棚田がハニ族の棚田の主なものである。棚田の主な景勝地区の分布を以下で説明する。

1 棚田の主要な景勝地区

(1) 元陽県の棚田の主要な景勝地区

元陽県の棚田は主に海拔280~1,800メートルにあり、各郷鎮にはみな棚田がある。『元陽県志』の記載によれば、1984年の土壤普查の示すところ、水田が30.04万畝(約20,600ha)、乾田^{訳注3}が8.89万畝(約6,000ha)、どちらも棚田の形式であり、合計38.93万畝(約26,600ha 畦の面積も含む)である。しかし、1985年の統計部門が発表した資料では水田の面積は13.47万畝(約9,000ha)、乾田の面積3.72万畝(約2,500ha)で、両者は棚田であり、合計17.19畝(約11,500ha使用可能な面積)となっている。現在、元陽県の棚田文化で世界遺産に申請しているその核心地域は新街鎮、牛角寨、勝村郷、攀枝花の重点景勝地区は表1のとおりである。

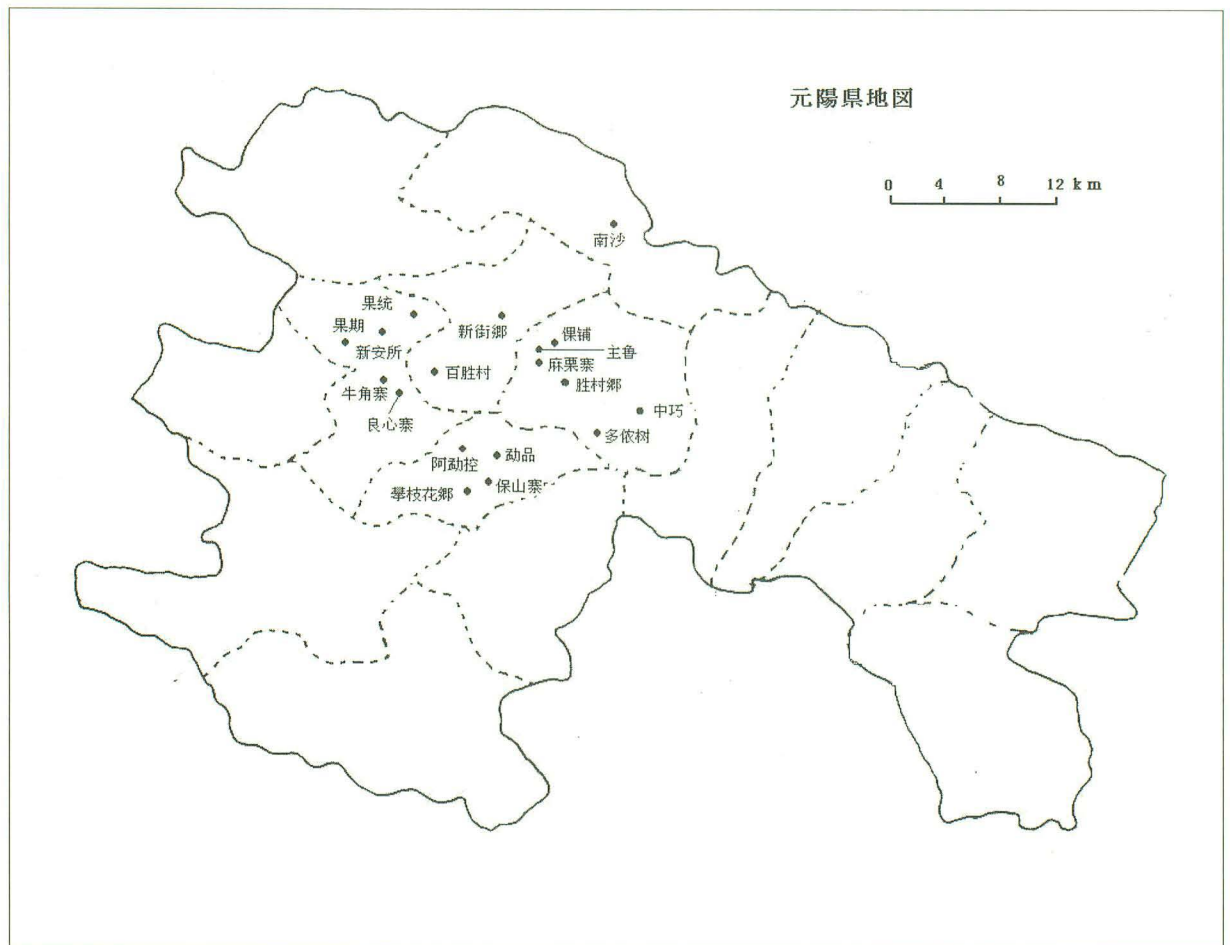


図3 元陽県の主な棚田景勝地 (『元陽県志』より訳者作成)

^{訳注3} 「乾田」とは中国語でも日本語でも湿田ではない田のことを指すが、ここでは雨季にしか水のない田のこと。ハニ族の田は1年中水を引くことのできる田(これをここでは水田と呼ぶ)が多い。

(2) 紅河県の棚田の主要な景勝地区

紅河県の棚田は海拔400～2,502メートルの間に分布し、大部分は1,000～1,800メートルの間の各郷鎮にわたって分布している。『紅河県志』に記載されている1984年の土壌普查の資料によれば、水田面積は182,832畝(約12,200ha 畦も含む)である。しかし、1984年の統計部門の資料によれば、水田86,102畝(約5,740ha)、乾田18,188畝(約1,210ha)であり、この2つはともに棚田であって、合計104,290畝(約6,950ha)になる。紅河県内の棚田の主要な景勝地区は表2のとおりである。

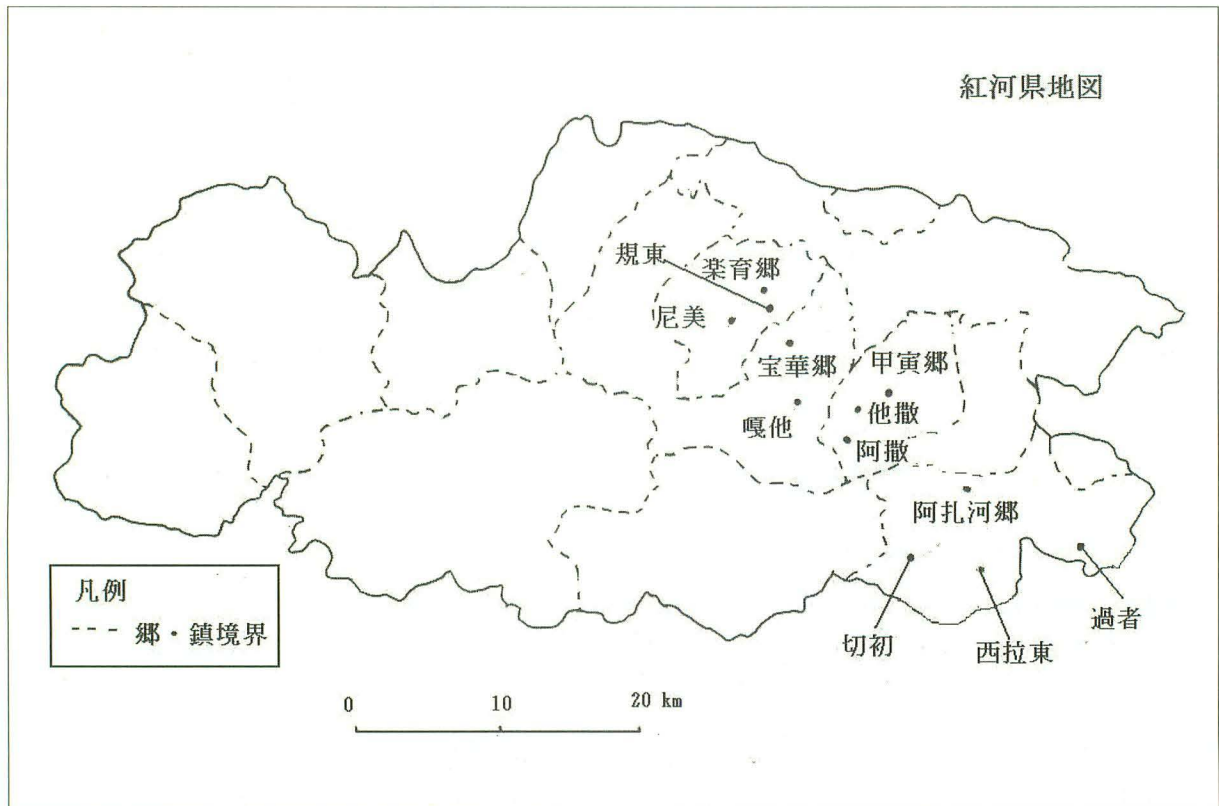


図4 紅河県の主な棚田景勝地 (『紅河県志』より訳者作成)

(3) 緑春県の棚田の主要な景勝地区

緑春県の棚田は300～1,800メートルの間にあり、大部分は600～1,700メートルに各郷鎮にわたって分布している。『緑春県志』に記載されている1985年の統計資料では、水田の面積が59,892畝(約3,990ha)、乾田面積が31,653畝(約2,110ha)でどちらも棚田に属し、合計91,525畝(約6,100ha)である。緑春県の主要な棚田の景勝地区は表3のとおりである。

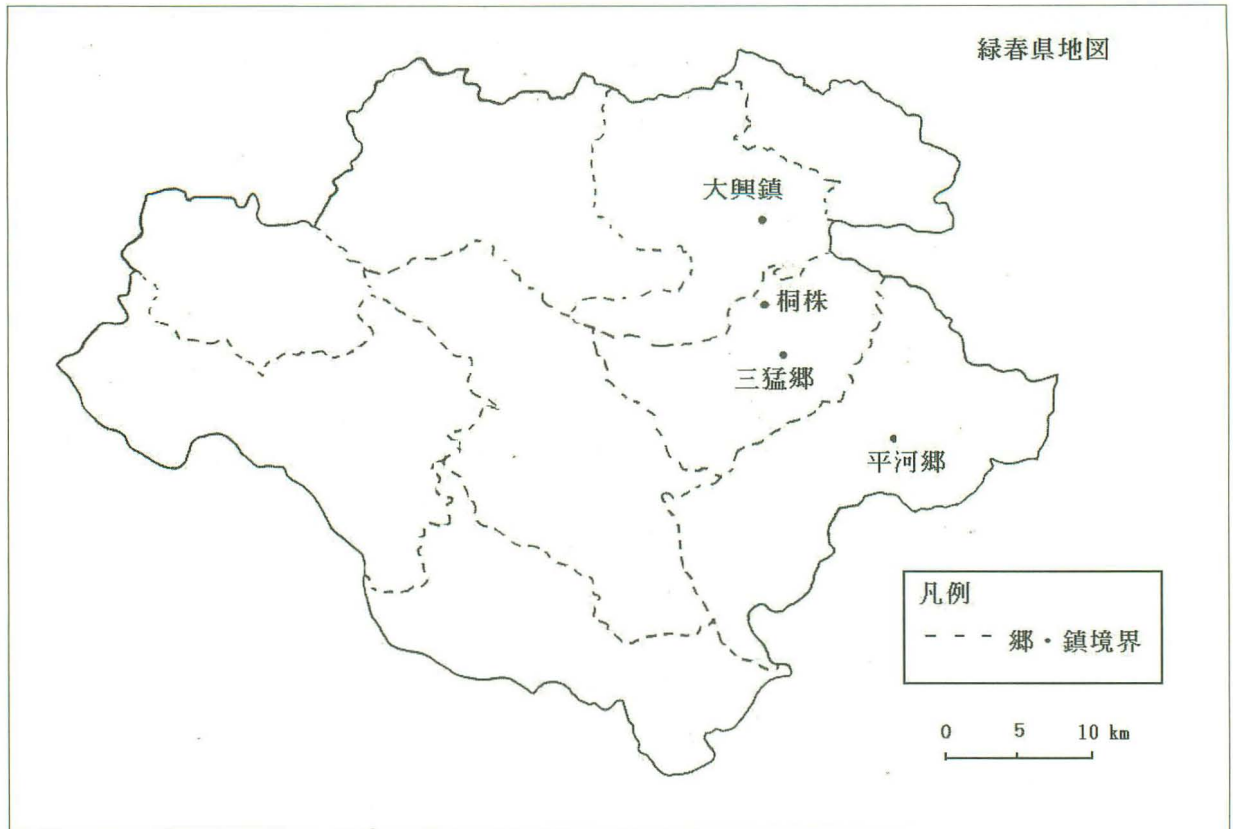


図5 紅河県の主な棚田景勝地 (『紅河県志』より訳者作成)

(4) 金平県の棚田の主要な景勝地区

金平県の稲田は101～1,900メートルの間に分布している。『金平苗族瑤族傣族自治州志』にある1984年の土壌普查の資料では、水田が288,306畝(約19,200ha)、乾田が36,797畝(約2,450ha)、合計325,103畝(約21,700ha 畦の面積も含む)である。その中で海拔600メートル以下の棚田が62,008畝(約4,130ha)、海拔600～1,000メートルの間の棚田が98,777畝(約6,590ha)、海拔1,000～1,300メートルの棚田が84,642畝(約5,640ha)、1,300～1,600メートルの棚田が69,438畝(約4,630ha)、1,600～1,900メートルの棚田が10,238畝(約680ha)ある。3つの主要な景勝地区は表4のとおりである。

2 棚田における稲の品種の分布

ハニ族の棚田農耕の長い歴史の中で、100種を越える在来種の稲の品種を把握しており、元陽県のみをとっていても120種がある。その中でウルチのインディカ種が80種余り、ウルチのジャポニカ種が10種余り、モチのインディカ種が30種余りある。こうした稲の品種は標高による気候帯に適応し、それぞれの気候帯では異なる品種が使われている。しかし、これらの品種は1つの共通した特徴を持っており、それは稲の高さが1.5メートル～2メートルにおよぶことがある点である。ハニ族の棚田の伝統的な品種を選んで表にしたのが次の表5で、そのなかでハニ族の棚田の稲の品種の一部をかいま見ることができる。

表1 元陽県棚田主要景勝地区統計表

地区名称	分布郷鎮	農家戸数	人口 (人)	棚田面積 (ha)	田1枚の 最大面積(a)	棚田の斜度 (度)	棚田の海拔 (海拔m)	現在植えられている 品 種
龍樹壩	新街鎮	809	3,655	173	20	15~20	1,350~1,580	月亮谷、紅脚老粳
陳安	新街鎮	653	3,172	127	13	14~23	1,300~1,570	月亮谷、紅脚老粳
箐口	新街鎮	1,381	6,193	207	20	10~20	1,300~1,820	月亮谷、紅脚老粳
百姓寨	新街鎮	665	3,051	182	20	14~22	1,300~1,570	交配種
勝村高城	勝村郷	1,478	7,541	170	35	14~20	1,430~1,830	交配種
多依樹	勝村郷	1,283	7,384	236	32	10~20	1,580~1,840	合系41号
壩達	勝村郷	545	2,954	137	27	16~21	1,640~1,820	合系41号
麻栗寨	勝村郷	565	2,945	82	42	10~20	1,400~1,640	滇超2号
主魯保鋪	勝村郷	704	3,469	160	27	15~22	1,500~1,750	合系41号
中巧新寨	勝村郷	1,429	7,110	191	31	16~23	1,380~1,520	交配種
牛角寨	牛角寨郷	1,012	4,734	194	17	25以上	1,140~1,450	交配種
新安所	牛角寨郷	1,099	5,797	209	21	25以上	1,170~1,920	交配種
果統	牛角寨郷	654	3,073	128	19	25以上	1,200~1,500	交配種
果期	牛角寨郷	955	4,902	242	20	25以上	1,050~1,780	交配種
良心寨	牛角寨郷	926	4,379	182	20	25以上	1,400~1,700	交配種
勐品	攀枝花郷	3,645	3,184	95	20	25以上	700~1,800	交配種
阿勐控	攀枝花郷	683	2,961	133	13	30~50	700~1,800	交配種、伝統種
保山寨	攀枝花郷	1,533	5,624	247	20	40~60	500~1,600	交配種

*原文は畝(ム一)で計算されているが、ヘクタール、アールに換算した。

表2 紅河県棚田主要景勝地区統計表

地区名称	分布郷鎮	農家戸数	人口 (人)	棚田面積 (ha)	田1枚の 最大面積(a)	棚田の斜度 (度)	棚田の海拔 (海拔m)	現在植えられている 品 種
撤馬壩	宝華郷	1,274	6,023	800	30	10~30	600~1,400	交配種
嘎他	宝華郷	492	2,252	43	21	20	1,250~1,700	軌鉄谷、蚂炸谷、 紅脚谷、糯谷
他撤明珠	甲寅郷	360	1,800	77	5	35	1,500~1,750	蚂炸谷、紅脚谷、糯谷
阿撤作夫	甲寅郷	313	1,565	53	14	30	1,500~1,750	得尼、紅脚谷
阿撤紅碧	甲寅郷	300	1,500	73	7	35	1,600~1,700	蚂炸谷、紅脚谷、糯谷
西拉東	阿扎河郷	598	2,990	58	7	25~35	880~2,100	交配種、紅脚谷
切初	阿扎河郷	590	2,950	70	8	25~35	1,000~2,242	交配種、紅脚谷
過者洛巴河	阿扎河郷	不明	1,344	150	17	20~35	1,100~2,502	紅脚谷、糯谷
規東	樂育郷	465	2,790	167	12	45~60	1,300~1,500	交配種、紅陽1号
尼美	樂育郷	680	3,400	200	7	30~60	1,500~1,700	交配種、紅陽1号

*原文は畝(ム一)で計算されているが、ヘクタール、アールに換算した。

表3 緑春県棚田主要景勝地区統計表

地区名称	分布郷鎮	農家戸数	人口 (人)	棚田面積 (ha)	田1枚の 最大面積(a)	棚田の斜度 (度)	棚田の海拔 (海拔m)	現在植えられている 品 種
規洞河	大興鎮	1,527	7,635	120	14	40	1,500	交配種
桐株	三猛郷	268	1,608	129	17	35	1,300	交配種
徳馬	三猛郷	352	1,760	75	20	30	1,400	交配種
洪角	平河郷	101	505	45	53	30	1,080	インディカ種

*原文は畝(ム一)で計算されているが、ヘクタール、アールに換算した。

表4 金平県棚田主要景勝地区統計表

地区名称	分布郷鎮	自然村数	農家戸数	人口(人)	棚田面積(ha)	田1枚の最大面積(a)	棚田の斜度(度)	棚田の海拔(海拔m)	現在植えられている品種
馬鹿塘	金河鎮	6	630	2,835	333	33	35	1,200~1,700	交配種
哈尼田	金河鎮	7	1,100	4,950	267	33	20	1,300~1,700	交配種

*原文は畝(ムー)で計算されているが、ヘクタール、アールに換算した。

表5 元陽ハニ族の棚田における稲の品種名一覧

品種名	ハニ語名	類型				分布高度(海拔メートル)	主要な特徴	栽培期間(日)	1アールあたりの取れ高(キログラム)
		イ ン デ ィ カ 種	水 稲 陸 稲	モ チ 種 ウ ル チ 種	早 稲 中 稲 晩 稲				
冷水谷	eelneivceil	イ	水	ウ	中	1400~1800	耐寒性強	179	52
螞蚱谷	miavbolceil	イ	水	ウ	中	1200~1500	適応力強、病抵抗性強	170	45~52
麻線谷	ceilkavq	イ	水	ウ	中	1000~1400	茎が細い、耐倒伏性弱	182	60
早谷	ceilcovq	イ	水	ウ	中	470~1925	病抵抗性強、耐倒伏性強、耐肥性大、早熟	120~177	45~52
長尾大老谷	不明	イ	水	ウ	中	1000~1400	穂の病抵抗性弱、耐倒伏性弱	180	69
小老粳	laoquegeqssaq	イ	水	ウ	中	900~1500	適応力強、病抵抗性強、耐倒伏性強	190	60~67
早熟黄谷	ceilcovq	イ	水	ウ	中	1500~1800	早熟、耐寒性強、適応力強	178	56
小黄谷	ceilsilssaq	イ	水	ウ	中	1500~1800	痩せ地でも育つ、耐倒伏性弱、脱粒性が易	179~180	30~45
大黄谷	ceilsilma	イ	水	ウ	中	1000~1400	適応力強、生産量が安定的	185	52~60
雷響谷	不明	イ	水	ウ	中	1200~1600	感光性強 遅く蒔いてもよい	177	60
小麻線谷	ceilkavqkavqssaq	イ	水	ウ	中	1000~1400	耐倒伏性強、季節性の病気になり易い	176	67
麻車車然	maceilceilssaq	イ	水	ウ	中	1500~1800	耐寒性強、脱粒性が易、適応力強、	179	52
烏嘴車呢	ceilnil	イ	水	ウ	中	1000~1500	病抵抗性強、耐肥性大、耐倒伏性弱	179	60
大黒谷	ceilnav	イ	水	ウ	中	1500~1600	耐倒伏性弱、耐寒性強	185	56
黒穀大老粳	ceilnavlaoqueq	イ	水	ウ	中	1200~1600	適応力強、病抵抗性強	183	60
緑葉谷	不明	イ	水	ウ	中	1550~1700	季節性の病気になり易い、耐寒性強	184	60
皮条谷	不明	イ	水	ウ	中	1400~1800	耐寒性強、病抵抗性強、脱粒性が難	174~180	37~52
老少谷	ceilsov	イ	水	ウ	中	700~1400	適応力中程度、耐倒伏性弱	196	56
烏嘴香糯	ceilnavhoqniaoq	イ	水	モ	中	800~1200	感光性強、耐肥性大、脱粒性が易	182	45~56
高山糯谷	holdolhoqniaoq	イ	水	モ	中	1500	耐寒性強、耐肥性大、耐倒伏性強、分蘖少	180	45~56
黄穀糯	laoqueqhoqniaoq	イ	水	モ	中 晩	1000~1300	晩熟、脱粒性が易、適応力強	180~200	52~60
白糯	wupiulhoqniaoq	イ	水	モ	中	1500以下	分蘖強、耐肥性大、	190	45~52
1多糯	nialdolhoqniaoq	イ	水	モ	中	1000~1400	病抵抗性強、耐倒伏性強、感光性強	195	60
紅穀冷水糯	eelceivqhoqniaoq	ジ	水	モ	中	1700	耐倒伏性強、耐寒性比較的強、脱粒性が易	182	37~52
長毛糯	不明	ジ	水	モ	中	750~2000	耐肥性大、耐寒性強、適応力強、	180~205	30~57
皮条糯	不明	ジ	水	モ	中	1600~1800	耐寒性強、病抵抗性強	179~188	45
小黄糯谷	ceilsilhoqniaoq	ジ	水	モ	中	1220~1700	早魃に強い、病抵抗性強、分蘖弱、耐倒伏性弱	186~200	37~45
紅糯谷	ceilnilhoqniaoq	ジ	水	モ	中 晩	1100~1700	耐肥性大、耐寒性強、耐倒伏性強	180	30~52

イ=インディカ種 ジ=ジャポニカ種 ウ=ウルチ種 モ=モチ種 早=早稲種 中=中稲種 晩=晩稲種 水=水稲

*原文は畝(ムー)で計算されているが、ヘクタール、アールに換算した。